

モバイルデバイスを用いたプレゼンテーション相互評価と振り返りの信頼性

The Reliability of Peer Assessment and Review Using Mobile device in Academic Presentations

北村 雅則
Masanori KITAMURA*1

山口 昌也
Masaya YAMAGUCHI*2

*1 南山大学

*2 国立国語研究所

*1Nanzan University *2National Institute for Japanese Language and Linguistics

〈あらまし〉 プレゼンテーションの際に行った、モバイルデバイスを用いたリアルタイムの相互評価とその結果をもとにした振り返りについて、それらの信頼性を分析した。その結果、リアルタイムアノテーションは632箇所中590箇所(93.4%)が妥当、振り返り時のコメントは64箇所中54箇所(84.4%)が妥当なものであった。不適当なものは、アノテーションの失敗やコメントのしかたといった運用上の問題であり、運用が適切に行われれば相互評価や振り返りの信頼性は高いと言える。

〈キーワード〉 協調学習, プレゼンテーション, 相互評価, 振り返り, モバイルデバイス

1. はじめに

我々は、ディスカッションやプレゼンテーションにおける相互評価や振り返りを支援するツールとして、PCで使用するFishWatchr(以下、FWと称す)とスマートフォンなどのモバイルデバイスで使用するFishWatchr Mini(以下、FWMと称す)を開発し、授業の実践研究を行ってきた。

FWやFWMを用いてプレゼンテーションの相互評価と振り返りをする際、それらを有効なものとするためには、相互評価と振り返りが妥当であること、つまり、信頼性が高い方がよいが、現状ではそれについて確認できていなかった。

相互評価の信頼性に関しては、鈴木他(2017)や長橋(2018)がライティングに関する分析を行っているが、プレゼンテーションについては、ライティングよりも絶対的な評価を見出しにくい。本研究では学習者がFWMによって付与したアノテーションとFWを用いて行った振り返りのコメントについて、教師の視点から妥当性を評価した結果を述べる。

2. 分析

プレゼンテーションと振り返りの実践概要を以下に示す。

1. 受講生17名を、3~4名の5グループにわけたグループプレゼンテーションを行う。
2. 聴衆は、FWMを使用して、「話し方・アイコンタクト・ジェスチャー・工夫・スライド・(内容の)新規性・(内容の)有用性」の6種類に

ついて、「良い/惜しい」をリアルタイムでアノテーションする。

3. プレゼンテーションをした次の回の授業で、FWを使用し、自分が担当したプレゼンテーションの映像とアノテーションを同期したデータを見る。その範囲につけられたアノテーション(種類+良い/惜しい)のうち、振り返りをする者が納得できたもの5箇所程度について、どのように良かった、または、惜しかったのか、その理由をコメントする。

4. FWMによるアノテーションがあった箇所以外について、振り返りをする者が改善の必要があると気づいた場合、そこを「要改善」箇所としてアノテーションし、コメントを残す。以上のような相互評価、振り返りの過程において、付与されたアノテーションとコメントの妥当性を教師が判定した。

表1は、プレゼンテーション中の聴衆が行ったリアルタイムアノテーションの種類と属性(良い/惜しい)の妥当性を判定したものである。ある時点において、異なる種類のアノテーション(例:聴衆Aは「話し方(良い)」,聴衆Bは「スライド(惜しい)」など)が存在するが、判定の際に映像を確認して、そのようなアノテーションを行った意図が不明でない限り妥当なアノテーションとした。

表1 アノテーションの妥当性

	妥当	不適当	計
良い	513	33	546
惜しい	77	9	86
要改善	13	1	14
計	603	43	646

聴衆によるアノテーションは、「要改善」を除いた632箇所中590箇所(93.4%)が妥当であった。不適当と判定したものは42箇所であったが、このうちアノテーションの意図が不明であったものが36箇所あった。これらはアノテーション時の失敗であったと推察される。また、同時間帯に同種類のアノテーションが複数存在した場合があったが、属性が異なっていたもの(例えば、話し方(良い)と話し方(惜しい)が混在したが、判定としては話し方(良い)であったもの)も存在し、それらは6箇所であった。

表2は、表1の「良い/惜しい」の計632箇所のうち、振り返りの際コメントが残された64箇所について示すものである。(1)アノテーション(表中では「アノ」と称す)の「良い/惜しい」とその妥当性、(2)コメントの妥当性の関係性を表している。

表2 アノテーションとコメントの妥当性

	コメント妥当	コメント不適当	計
良いアノ妥当	28	9	37
良いアノ不適当	0	0	0
惜しいアノ妥当	26	0	26
惜しいアノ不適当	0	1	1
計	54	10	64

アノテーション・コメント双方が妥当であるものは、アノテーションの属性の「良い/惜しい」を合わせて64箇所中54箇所(84.4%)であった。コメントが不適当な全10箇所のうち9箇所については、アノテーションに対する振り返りのコメントになっていないことから不適当としたものである(例えば、アノテーションは話し方(良い)であったが、コメントはスライドに関する内容というようなものであった)。残りの1箇所は、話し方(良い)というアノテーションに対して、それが妥当であるにもかかわらず、「少し早口のため聞き取りづらい」というコメントが残されていた。映像を見る限り、振り返りを行ったプレゼンターが全体的に早口であるとは感じられず、また、アノテーション時点においても、特別早口になったとは思われなかったため、コメントが不適当であると判断した。これは、他者からの評価と自己評価にずれが生じているものであるが、他者の評価を受けて、自己評価を過剰に下げた例と言える。

表3は、FWMによるアノテーションはなかったが、振り返りの際に映像を見返して自分自身で気づいた要改善箇所とそのコメントの妥当性に

ついて判定したものである。

表3 要改善箇所とコメントの妥当性

	コメント妥当	コメント不適当	計
要改善箇所妥当	13	0	13
要改善箇所不適当	1	0	1
計	14	0	14

要改善箇所とされた14箇所すべてについて、反省や改善に向けたコメントの内容に問題は見られなかった。「要改善箇所・不適当」とした1箇所については、「自分的に新規性はあまりないと思ってたのでよかった」というコメントが残されていた。そのコメントが付された3秒後に、「新規性(良い)」というアノテーションがあったため、実際は振り返りの際に発見した「要改善箇所」ではなく、振り返りの意図や振り返り時に行う作業の理解不足の可能性もあるが、表2の箇所で述べた、自己評価を過剰に下げる例とは異なり、他者からの評価によって正当な自己評価ができるようになった例と言える。

3. おわりに

プレゼンテーションの相互評価と振り返りを検証した結果、不適当と思われるものは、アノテーションの失敗やコメントのしかたの問題であり、適切に行われれば相互評価や振り返りの信頼性が高いことが分かった。今後、こうした実践上の問題を解消し、FMWとFWを用いた相互評価と振り返りの効果の分析につなげたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 17K01105 の助成の成果を受けたものである。

参考文献

- 長橋雅俊 (2018) 「日本人 EFL 学習者へ相互評価を導入したライティング授業の実行可能性と教育的効果」, *Bulletin of Seitoku UNIVERSITY, Bulletin of Seitoku University Junior College* (29), pp.45-52
- 鈴木伸子・石川奈保子・向後千春 (2017) 「大学院のオンライン授業におけるレポート相互評価の実践-ループリック活用が評価の信頼性・妥当性におよぼす効果の検討-」『コンピュータ&エデュケーション』43, pp. 43-48